

報告④

(特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

## 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(3) 奥尻高校の根底にある考え方

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、小さいという柔軟さ、過剰投資、ないもの探し、あるもの探し、ありあわせ、地域の生態系、人交密度、地域の特色を生かした教育

松原聡史教諭、井上壮紀教頭、清水信彦校長に対するインタビュ  
後の雑談の中で奥尻高校の取り組みの根底にある考え方について興味  
深いことが話されたので紹介させていただきたい。

### 1 小さいという柔軟さ

松原教諭…今、こういう学校って結構増えてきていると思うんですけど、  
これどんどんやつぱり増えていきますかね？ どうなんでしょう？

——まず、統廃合の危機にある学校は、間違いなく増えていくと思  
います。この一〇年ほどで、およそ六〇〇校がなくなっていますし、同  
じような傾向が続く可能性があります。そんな中で、高校がなくなる

ていうことは、地元にとってはすごく大きなことですし、先生方の中  
でも高校がなくなっても自分は次に行けばいいやというのとはちよ  
つと違うという意識が広がっているように思います。

高校の募集対策では、進学実績を高めることで入学者を増やす。あ  
るいは、部活動を活発にすることで入学者を増やすというのが、長い  
間考えられていたと思うんですけども、その考え方だとちよつと無理  
だというふうに捉えている高校が増えていきます。

そのような中で、地域の大人と一緒に地域の活性化を勉強するとい  
う方法での高校魅力化が広がっています。今後もそういった魅力化の  
高校が益々増えてくんだらうと思います。奥尻高校の場合は、町との  
関係が深まっています。深める方法は、いい意味でアバウトになさ  
つているところがあるような気がします。年間計画をビシツと決めて



そのとおりにやろうとしたら多分うまくいかなくと思います。そういう意味では従来型の学校運営の発想とは異なる発想だと思います。こういう学校が増えてきているか、ということですが、奥尻高校と同じような高校は増えつつありますし、もっと増えるんだろうと予想しています。

松原教諭…僕、この魅力化ということというか、この地元じゃない子たちをここに入れるっていうことが、島にとってはすごく僕は一番の策かなと思っています。地元の子はほんとに故郷を作ったりということがいいなと思ってやってるんですけど、島外が出身の子も島にいる間に今住んでるこの町の課題を感じて、第二の故郷を作っています。これのデメリットというか、これによって起こるマイナス面っていうものはあるんだろうかってよく考えることがあって、そこも把握しながらやらないと長続きしないのかなと思うんですね。流行りでやってしまうと。そういうデメリットってこういうのって何かやっぱりあるもんなんですか？

——デメリットについては聞いたことがないです。ただ、進学実績とか部活動の実績で学校を存続させようとして、そのためにエネルギーを消耗するとか、寮を作るとかの初期投資、あるいは年間の経費が高くなってしまうと学校経営が苦しくなってしまうと思います。そういう意味では進学実績と部活動（の面での魅力化）の競争にはあまり投資しないほうがいいだろうと思っています。

奥尻高校は、先ほどの校長先生の話の中にも何回か出てきてると思いますし、松原先生の話の中にも出てると思うんですけども、小さい

町、小さい学校という資源があります。このことの価値に気付いていて、そこからスタートしようとしています。これは、都市部の大規模進学校と比較して無いものなだけで、大学進学のための何かを引っ張ってくるとかしてしまいうよりも、小さいことの良さを有効に活用するという方法であり、奥尻高校のやり方にとっては正解だと思います。

それができるといえるのは、きっと町の中に補助金に頼って生き残ろうとか、無いものがあるからこはもう駄目なんだと諦めるんじゃないかと、町の中にあるものを活用していこう、利用していこうという考え方が既にある程度広がっているからではないかというふうに思いました。

それなので、そうした町の流れを活用して、なお且つ小さい学校ならではの良さや、ここはずっとスキューバダイビングもなさっているようにですけども、それらの資源を活用して、高校魅力化を続けていけるのであれば、そんなに失敗することはないと思います。最大のデメリットはコストがかかりすぎてしまうということですから、それがないのであれば問題ないというふうに思います。

## 2 あり合わせ料理（アバウトさ）の強み

松原教諭：先生から見ても、奥尻高校のいいなって、一番いいなって思ったのは何ですか？ 僕たち中にいるので、どれがほかの人にとって、これはいいなって思うことなのかって正直、しつくり来てなくて、奥尻高校のここが一番いいよなって感じたところってなんですか？

——今一番感じてるのは、やっぱりこれも先ほど話しましたが、

フットワークが軽いということ。あるいは、ネガティブな思考に陥らないということ。町の方々、それから先生方のいい意味でのアバウトさかなというふうに感じます。もしどなたかがすごく生真面目な方で、PDCAサイクルがきっちりできてないじゃないか、みたいなことを言い出したら、こなすものになってしまいうし、そもそも新しい取り組みは当初計画通りに達成することはできないんですよ。

新規事業立ち上げの研究で言われていることは、あり合わせ料理が大事だということです。あり合わせ料理を作っていく中で、目的が徐々に明確化してくるということです。もちろん大きな旗印は必要ですが、最初から明確な目標があって、それでそれに必要な資源を計画的に導入しようというのは、これはもう嫌になっちゃうだけ。

松原教諭：島では無理なパターンですね。確かに。

——そういうふうにあります。なので、アバウトさがいい方向に動いている。そして、あり合わせの素材・資源としての、小回りがきいたり、仲がよかったり、子どもたちの成長を見るのが楽しかったり、子どもたちの成長に関われるのが楽しかったり、というのが、この学校のいいところなんだろうと思います。

松原教諭：ありがとうございます。最後にめちゃくちゃ気持ちが良くなりました。

清水校長：最大限の褒め言葉をありがとうございます。



松原教諭…ありがとうございます。すいません。

井上教頭…頑張ろう。

松原教諭…そうですね。

——あちこちで奥尻高校の取り組みを宣伝させていただきますので。

清水校長…ありがとうございます。全国にこういう学校が増えたらいいのになと思っています。

——そうですね。

清水校長…この企画をやるということではなくて、その町、その町に必要なものを作り出していくことが大切です。大きい学校がやっているからやった方がいいよではなくて、この町に必要なことは何だろうというのをどんどん作っていったら良いと思います。きつと生徒たちが、こういうことを勉強したいから、あの学校に行くんだとか、地元で勉強したいからうちの学校に来るんだとなると、それがダイバーシティという言葉につながっていくのかなと思います。いろんな考え方があると思いますが、もっともつと広がっていけば良いと思います。

——そこ大事だと感じています。隠岐島前高校さんを例にすると、最初のころは他校のモデルとしての使い勝手が良かったと思うんですけども、今はかなり特色を明確に出してきているので、あそこの地域の

あの学校にとっての一つの完成形に近づいた形になってきています。だから、他の地域の他の高校が隠岐島前さんと同じようなことやったらこれは地域の生態系を崩してしまつと思ひます。

清水校長…そうですね。ほんとにそうだと思います。

松原教諭…きつとそうやってやったら全国どの学校も違うことやるようになるんですかね？方向性は一緒だとしても。絶対町の課題って違いますよね？

清水校長…それぞれで違う課題があるので、そこに合ったやり方で進めた方が良いでしょうね。

松原教諭…空気も違うのと同じように。そっちの方が面白いんだろうな。

井上教頭…うちは割と地域の方々も積極的にきてくれて、できてますけど、そうじゃない地域はそうじゃないの何かやり方を考えていかなきゃいけないでしょうから。枠組み自体もいろんなことが考えられるんだと思うんですけど。

### 3 人口密度が高くなること、人材が集約されること

松原教諭…札幌市とかまた違う課題がきつとあるんだろうな。島留学みたいなことをやると、例えば東京から流出するじゃないですか。その町はどうなるんですかね？ どうなるんでしょう。僕はいつもそれ

も考えてます。減つても全員がいなくなることはないですけど、志高の子がどんだんもし地方に出て行つたら、日本の中心部は崩れてくことはないのかなとかつていうのを考えてたりするんですけど、そういうことはないんですか？

——日本の産業全体がどうなるかと、日本の経済全体がどうなるかについていうのはこれまた一つ難しい話に入り込んでしまふと思うんですけども、労働集約型でずつとやってきていて、日本は人口密度が高いということが非常にメリットになってきた国だと思ひます。その場合、これまでは人の口の密度の人口密度だったんですけども、今後課題となるのは、人の交わりの密度の人口密度を高くすることになると思ひます。人口密度を高くしていくことによって、暮らしやすいし、そして活発になるといふふうな話だと思ひます。

井上教頭…面白いですね。確かに。ただ、よくわからない人たちがいっぱいいればいいではなくて、つながつて人がどれだけ集まるかという感じですか？

——つながれないと駄目です。朝から校長先生の話をうかがつて素晴らしいと思つたのは、奥尻高校では生徒だけでなく先生も、先生と町民もつながりが深くなつたつていうことでした。やつぱり熱い思いを持ってつながり、一歩前へ進めるような人たち。そういう人たちがたくさんいるということが、島にとつても、それから日本全体にとつても大事なんだろうと考えてます。



松原教諭…そういうことですか。

——もう一つ付け加えると、奥尻高校でなさってるようなことを中学、高校時代にやって、その上で大学に進学して、そしてグローバルカンパニーで働いたとしても、高校時代に地域を大事にするような生活をしていた場合には、これは私の期待なんですけども、地元に戻らずに国際企業に勤めたとしても、人を大事にしたり、地域を大事にした働き方をしてくれるんじゃないかなというふうに信じたい。これはもう全然根拠ないんですけども、信じたいなと思ってます。

松原教諭…そのとき踏みしめてる土地を大切にすると人が増えたらいいですよ。

#### 4 公立高校の強味としての高校魅力化

——全くそう思います。人によって違うんですけども、中学校まではあまり考えずに、地元が好きだなとか、地元の雰囲気がかうだなというふうに思ったり感じたりします。高校時代になって、思考や行動の対象として地域とか、地域で生きてきた自分を捉えることが比較できるようなと思います。その時代をこの島で過ごしておく。あるいは、人が人を大事にするような地域で過ごしておくというのがとっても価値があるだろうと思ってます。

清水校長…いろんな学校が出てきたらいいなと思います。これからの高校教育でどの学校も特色ある教育を進めなさいと言われていて、一

番進めにくいのが都市部の大規模校の普通科の高校かなと。文科省の方から普通科の魅力化を進めなさい、でも実際に大規模校ではなかなか小回りが効かないので、難しいところもあるのかなと思います。うちは小回りが効くのでいいんですけど、やっぱり大規模な学校で近くに似たような学校が存在している高校では、何を特色に打ち出すかというのは大きな課題だと思います。

——そういうことですよ。社会に開かれた教育課程ですからね。

清水校長…社会に開かれた教育課程の実現に向けて、どの学校も考えている状態ですね。

松原教諭…特色を作ろうとかつてなっちゃうと難しいですよ。その特色という言葉がすごく難しいですよ。隣と違わなきゃいけないみたいなものってなかなか難しいですよ。

——都市の場合は、私立高校がいろんな形でそれをしようとしていますよね。まさに特色を出さないと終わりですから。

松原教諭…そっか。そういう意味では公立は強いんですね。

——でも、これから定員減らしてくとしたら、地方郡部で減らせない分、例えば札幌なんかでも真ん中のほうの学校から統廃合してくだろうと思うんですよ。クラス数減らすのも都心部からですよ。



井上教頭…昔だったら一〇クラスとか八クラスとかだったのが、もう六とか四とかですもんね。

——驚くほど少なくなっちゃいますよね。

松原教諭…そうですね。おつきの方がやりやすいんですか？ やっぱり。どうなんですか？ 僕大きい学校って行ったことがなくて。

## 5 都市大規模校と地方小規模校

松原教諭…例えば八クラスとかあるのと、四クラスだったら働いてる人、教育のしやすさというかは、やっぱり多い方が、

清水校長…大きい学校は、教員も多いよね。その分、質の高い教育はできるかもしれない。教科や受験指導なんかも含めて、小規模校だったら数学や教科担当が一名しかないとか、教科の部分では展開授業など大きな学校ではたくさんできるとか。

井上教頭…選択科目とかも数学だけで六人も八人もいたらいろんなことができる。というのはあるけども、逆に何かやるってなってもどうか。

松原教諭…そうか。そういうことなんですよ。逆にそこさえ把握できれば勝負は全然できるんですね。



井上教頭…うん。できると思う。

松原教諭…スタディーサブリを使ったり、AI使ったりして、教えるっていうところに特化するものをうまく取り入れたらその負けはないですね。

井上教頭…大規模校よりはちょっと厳しいと思うのは、部活動、受験指導のいろいろな部分でやや弱いかもしれないけど、逆に小規模だから個別に対応できる部分はあると思うから。

松原教諭…そういうことか。

— 都市の大規模校は、周りに予備校がいっぱいあるので、進学指導はある意味任せざるを得ないですね。そっちに。

松原教諭…専門家がいますね。

— 情報量全然違いますから。あと、私なら絶対に八クラスとか一〇クラスあるようなところの教務主任はやりたくないです。時間割作るだけで大変です。

松原教諭…そう考えるとやっぱり面白いですね。

— 小さな高校だと、何か必要だったことになったら、じゃあその時間来週使おうとか言って、全校的にできるわけですよ。



松原教諭…暮らししたりするのも都市部の方がやっぱりいいんですね？  
僕はもう五年間いるので、奥尻の生活がとても良いですけど、やっぱり都市部の方が便利なのかな。そう考えるとやっぱりいろんなことが考えられるな。

清水校長…大学とか企業とかいろいろな連携を組んで取り組みたいと言ったら、例えば札幌とか都市部に行ったら、近くにあるからね。例えば奥尻だったら日程決めて年に一、二回しか来てくれないところを、例えば上手く活用すれば月一回とか関わる方法もとれるかもしれないね。

松原教諭…できちゃう。

清水校長…大学や企業の方に来てもらうだけでなく、生徒を大学に連れて行くということも可能だけど、うちはやっぱり移動という大きな壁があるのでそこがすごく課題だね。都市部には近くに大学や企業があるので、実は取り組みやすい環境が大きな学校にはあるかもしれない。

松原教諭…そうか。すぐそこに大学があるんですね。

井上教頭…意外とすぐそこにあるけど、あんまり連携してるところもそんなんでもないのかなっていう。

清水校長…例えば函館の高校にいた時には、市内にある未来大学や教育大学に行って学習をしたり、総合的な学習（探究）の時間に講師として招いたり、夏休みには地域探究学習と言って、生徒が事業所に行つて体験学習をする取り組みもしていましたね。そこには先生方が付かずに、大学や企業であったり、地域の方々から教わる、そんな取り組みをして、終わった後にレポートを書いて単位にするような取り組みをしていましたね。

松原教諭…すごい。面白い。

清水校長…ただ近くに大学がなくても、そういう取り組みは奥尻高校ならではの取り組みとして、考えたらICTを活用した遠隔教育や、地域の方に協力してもらえば十分にできそうかなと思っているけどね。

井上教頭…うちは人数少ないからそういう機会が、もしあったら全員がそれができるっていうふうになるメリットはあるので。

松原教諭…そうですね。移動面白いですね。移動っていう課題は面白い課題。フェリーで出掛けるだけでも、ちよつと函館に行くだけでも、僕たちはすごく面白いのは、何日も前から波の高さがどうかを確認してとか、でも僕それってすごくいいことだと思ってます。自然と生きるってすぐ人間って忘れるんですけど、僕たちは常に自然と生きてない和生活ができないので、うちの妻とかフェリー波をチェックして、「ちよつと止まりそうだった」って言って食材多めに買うとか、それが当たり前。

うちの子たちも、「おばあちゃんに会いに行きたい」って言うけど、「フェリー止まってるから我慢しよう」ってこんな話、都会では絶対ないですよ。でも、自然と共に人間が生きるってそういうことなので、それはほんとに課題なんですけど、教育の効果はすごく高い。

なので、この島外から来た子たちが帰る計画を立てるのとかは、普通のところ、陸つなぎのところに行ってる子にはあり得ない話ですよ。もう飛行機一カ月前から取ったりして、なのに濃霧で飛ばなくて。そういう意味では、成長っていう意味ではすごく課題はやっぱり面白い。

——時間の流れ方が面白いと思ってるんですけども、地方に行くと、正月の食べ物や春から種撒いて植えてくというそういうすごい長期的な計画があると思うと、今日は晴れたから田植えがあるから会えないっていうふうに言われちゃったりとか、すごい長期計画があるかと思うと、目先のことはもう天気任せなんだというそれがすごく面白いと思います。

本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。